

空



2006年

SORA 13号

晴夜 (13) | 3

柴田 佐知子

裏側は黄泉の口あく冬怒濤

美しくなければ雪女にもなれず

その人にときどき見られ毛糸編む

総身を煤けし色に御開帳
人間に白歯犬歯や黄沙降る
鬼いつも跣で逃げて春の月
嶺の神敬ひ懼れ野火放つ
耳たぶを灯して桜仰ぎけり
海底に魚の血めぐる涅槃西風

初芝居

苑
実
耶

父の座の空きて白かり鏡餅

初芝居客席も雪降つてをり

篠笛に合はせ獅子舞口開けし

母逝きぬ春著にしつけ残せしまま

子の尻のいよよやはらか初湯殿

青磁には一花一葉春近し



波のまま揺れて水鳥遠ざかる

初霞山裾に建つ美術館

父の居る方より山の笑ひけり

子の恋は見守るばかり沈丁花

菜の花の大河に添ひてうねりけり

曲水の庭に真紅の椿落つ

ふはふはのいちごケーキや鳥の声

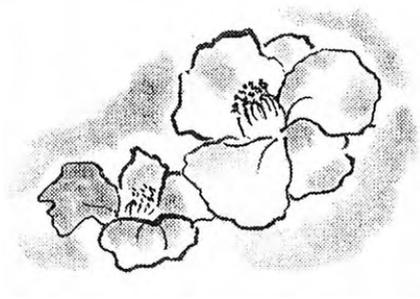
父祖の地へ花の峠を越えにけり

馬小屋を通り抜けたる春の風

女正月

高倉恵美子

麦の芽の半寸ほどのみどりかな
楽しみのひとつ白菜漬けてをり
入院の友は帰らず実万両
屠蘇のあとどぶろく出してきたりけり
むかし叔父あり元旦に麦踏み
三日はや二人となりて餅を焼く



裏庭に穴を掘りたる鍬はじめ

誉められて大根漬けを配りけり

水仙や売りに出されし友の家

大楠を裸木にする初仕事

土竜打つ雨の一日となりにけり

昭和にて手繰る齡や女正月

老人は老人どうし小豆粥

白菜の中の青虫動きをり

大根の青首長きものより抜く

前
髪

遠
野
萌

山の雨いつしか雪に地藏堂
時雨るるや河岸に総家と総本家
括られて丈の伸びたる紫苑かな
うしろより閻魔がのぞく夕焚火
雪煙あげて駿馬や地平線
極月や炎はみ出す登り窯



使はねば雨に細りし沢庵石

松過ぎの花のこぼるる墓の前

醬油屋の奥を灯せり古雛

雪乗せて町に戻りし送迎車

人形の前髪揃ふ桃の花

菜の花の裾野広げて富士白し

歩板山へ向ひし雪解かな

鐘撞きて山なみ暮るる嵯峨野かな

春めくや案内されたる逆さ富士

寒波急

服部 早苗

武蔵野を掃きあつめたる落葉籠

帰り花ちよつと流れにさからひて

茶の花や丑寅に猫出で入りす

白檜の裏にまはれば狐罨

冬木立夜空は雲を置きにけり

十二支のひとつを忘れ耳袋



狐火や戀といふ字のもつれゐる

捨てきれぬ温もりにある懐炉かな

着ぶくれて引く糸偏の字のあまた

クリスマス・ソング高音階はハミングす

討入りの日の水揚げて冬薔薇

武甲山

凍雲や山は削られつつ無音

強霜にして新聞の休刊日

寒波急漬物の塩わしづかみ

母はむかし籠球選手大旦

鴨の水

青山 悠

枯菊を焚いてうしろを振り向かず

夕づくや雀のしづむ枯真菰

飾らるる日蓑雨蓑冬に入る

堰落ちて音の変れる鴨の水

竹林は暗しくらしと冬の虫

鉋害の残る山腹鷹渡る

蛭雪時代てふ本ありし膝毛布



降る雪や和尚に飼はれ烏骨鶏

相輪に雲一朵なきお元日

玉競りの児に容赦なき勢ひ水

あめつちの穏やかなりし三ヶ日

こもごもに齡励ます初電話

四捨五入してはなし聞く外は雪

赤牛の上目づかひに日脚伸ぶ

凧揚げの子の声走る都府楼址

茶の花に沈み母なる筑後川